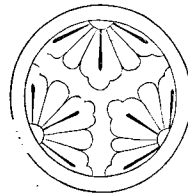


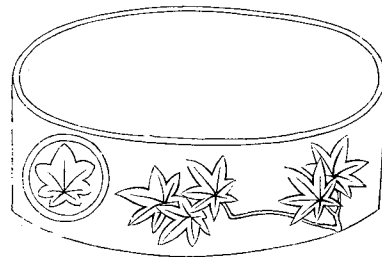
波などには、びんつけ入れともいへりと見えて、大坂版の前匂付に、さても結構な日和さまかな、月代へ鬢付入を頂きて、是は小判金の形に似たるに依て云り、
 〔近世奇跡考〕四 高尾所置鬢水入圖

表蠟色紅葉金蒔繪

紋かな具内朱、ふち金いつかけ、口長さしわたし、三寸四分、横二寸二分、



裏ニカクノ如キ紋アリ



此器は今より三十とせばかりさき、吉原の駿河屋魚躍といふ者、方圓庵得器におくりあたへしを、ちかごろ某君にたてまつりしとなん、某君子傳○京がふるきを好める事をきかせ玉ひ、めして古書畫古器等を見せしめ玉ふついで、此器をも見せ玉ふか、る小器さへ、後の世に傳へて、人のめづるは、まことに高尾がほまれといふべし、

〔甲子夜話〕七 貴上ニハ蔓壜鬢水入トテ有テ、蔓壜ニハ五味子ノ莖ヲ截テ立テ、鬢水入ニハ水ヲイ
 レ、○中 故ニ貴上ノ品ハ黒漆ニ金銀ノ蒔繪ニシ、卑下ノハ竹筒ニ淺マシキ陶器ノ水入ニテ、婢女
 モ必コノ物ヲ持リ、今ハ絶テ其品ヲ見ルコトサヘ無ク、稀ニハ蒔繪ノモノ杯、骨董肆ニ見ルノミ、
 〔三省録〕五 附言 理齋云、むかしは家毎に鬢水入といふかつらを入し器あり、

〔倭名類聚抄〕十四 四 匱 說文云、匱移爾反、一音移、和名波邇佐布、柄中有道、可以注水之器也、俗用椽字、所出未詳、但和名之義、或說云、有柄半插其内、故呼爲半插也、

匱名稱